説教要旨『ホレブのおいしい水』

出エジプト記 17 章 1～7 節

エジプトの支配から脱出したイスラエルの人々は、モーセに率いられてシナイ半島の荒野に辿り着きました。しかし、荒野は食べ物や飲み物を欠き、人も住まない死と隣り合わせの世界です。不満が鬱積し、喉の渇いた人々は「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのか。…渇きで殺すためなのか」（3 節）と不平を漏らします。それに対して神は、すでにホレブの岩下を流れている水脈の在りかを教えることで、水を得させようとするのでした。「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠しているからだよ。」という『星の王子さま』の一節を思い出します。“荒野や砂漠といった全く先の見えない状況の中にも、すでに私達の命を潤す井戸水、神の思いが秘められているのであって、あなたがたはそれを探し求めることが出来る世界に生きているのだ”…そんな事柄を本日の聖書箇所が約束してくれているように思います。

作家の鷲田清一さんが、次のようなエピソードを紹介しておられます。「プロ野球の選手になれなかったある球児が、それでも諦めきれずに独立リーグに入ったが、結局はくすぶりっぱなし。そんなある日、野球にのめり込みはじめた少年の頃の、あの球場の芝生の感触が突然めらめらと蘇ってきた。それでその感触を、後輩たちの体にもきちんと刻みつけてあげたいと、芝生えの職人に転身することにした。希望を『修正』したのである」。見立て通りにはいかない現実…しかしそれは、すでに備えられている新たな希望へと「修正」する時なのだと、鷲田さんは捉えておられます。

人はよく、自分の思い描く通りに事が進んでいない時、不平を漏らします。イスラエルの人々もエジプトを出た後、奴隷から解放されて、不自由ない暮らしを待ち望んでいたことでしょう。しかし、現実はそう甘くはありません。今度は荒野の苦しみが立ちはだかるのです。モーセは、その荒野を「マサメリバ」と名付けました。人々が「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」（7 節）と言って、神を試し（マサ）、モーセと争った（メリバ）場所だからです。だとすれば、この世は、どこもかしこも「マサメリバ」です。「こんなはずではなかった」と不平を漏らし、それを誰かのせいにして争い合い、思わず神を疑い試したくなるようなところを私達は生きているからです。しかし、そんな地にも、目には見えない命の水が脈々と流れていることを聖書は伝えています。受難節の時、「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない」（ヨハネ福 4:14）と言わる主イエスの言葉に道案内されながら、私達が生きる荒れ野に神が備えられたホレブのおいしい水を探しに出かけましょう。

（文責：望月達朗牧師）